

補足説明

- ①ア. 構えるときは左足を出し、刀を中段から大きく諸手左上段に振りかぶる気持で構え、刃先は仕太刀に向ける。
- イ. 諸手左上段の構えから、そのまま右拳を右肩のあたりまで下ろした形で、刀をとる位置は鐙を口の高さにし、口から約一握り離す。
- ウ. 上段に振りかぶってから、八相の構えになるのではない。
- エ. 左拳の位置はほぼ正中線上とし、刀身の傾きは後ろ上方約45度とする。
- オ. 右足先はやや外側に向け、踵が床に着かないように注意する。
- ①ア. 構えるときは右足を後ろにひきながら、刀を中段から右拳がおおむね口の高さを通るくらいに大きく右脇にとり、左半身となる。
- イ. 右足先はやや外側に向け、踵が床に着かないように注意する。
- ウ. 剣先は後ろに、刃先は右斜め下^{かかと}に向け、特に刀身が打太刀から見えないようにする。
- エ. 左拳は、「臍」の右斜め下約一握りのところにおく。このとき、左手首は曲げない。
- オ. 剣先は下段の構えより少し下げた位置にとる。

② 歩幅は、やや小さく三步進む。

- ③ア. 振りかぶる程度は、両腕の間から相手が見えるくらいとする。
- イ. 正面に打ち込むときは諸手を十分に伸ばし、斜め打ちにならないよう真っ直ぐに打ち下ろす
- ウ. 四本目は大技を示したものであるから、大きく伸びるようにするのがよい。そのため間合の取り方に特に注意しなければならない。
- エ. いったん上段をとってから打ち込むのではなく、振りかぶりと打ちとは一拍子で行う。

- ⑤ ^{あいうち}相打になった後、間合が近すぎる場合は、打太刀が左足からひいて間合をとる。
- ⑥ア. 上体はやや前傾する。
- イ. 剣先の高さは水平よりやや低目となり、刃先は右を向く。
- ウ. 目付けを外さず、顔は仕太刀に向ける。
- ⑥ア. 左拳を頭上に上げると同時に、体を左に移し、刃先を後ろにして巻き返す。
- イ. 斜め打ちにならないよう真っ直ぐに大きく振りかぶって打つ。
- ウ. いったん頭上で止めて打つのではなく、巻き返しと打ちとは一拍子で行う。
- ⑦ 仕太刀に残心を示させつつ中段になりながら、左足から刀を抜き合せた位置に戻る。
- ⑦ 二本目と同じように形に表さないので、十分に残心の気位を示しながら、右足から刀を抜き合せた位置に戻る。